

第1回科学委員会について

日時：2023年5月24日、四谷保健センターに於いて下記の出席者を得て開催されました。

参加者：鹿野委員、中静委員、松田委員、マハラジャン委員、安成委員、山本委員
津田オブザーバー、梶理事長、三木常務理事、小林担当理事、手塚理事・事務局長、内藤事務員、

欠席者：溝口委員、渡辺委員、古川オブザーバー

はじめに梶理事長より、第1回の科学委員会は、1年以上前に開催が予定されていたが、コロナ禍のためのびのびとなった事情の説明があり、また協議会の現状から、委員には完全なボランティアとしての位置づけで積極的に参加されたことへの謝意が表明されました。

ついで出席者の自己紹介がなされました。委員は専門分野が異なるため、初対面の間柄も多かったのですが、全員が「山」の環境やそこで暮らす人々の文化、社会への関心を共有するだけに、和気あいあいとしたなかにも質問やコメントが飛び交い、この段階から、熱気にあふれた雰囲気となりました。

そのあと、理事会側から、現理事会が会の運営にあたるようになった2020年度以降の協議会の活動方針と実施された事業、課題等について説明がなされました。特に2022年度の国連国際山岳年以降、FAO（世界食糧農業機構）が主管してきた国際山の日（12月11日）を、2022年度には協議会が主体となって取り組んだ「国際山岳年+20」のシンポジウム（黒部市で開催）については、その趣旨を含め、詳しく報告されました。また近い将来の課題である「山の基本法」（仮称）制定に向けての取り組みの現状や、公益法人化、広報活動のあり方等についても触れられました。

ここでも各委員からは、質問のほか、補足の説明や情報提供、意見の開陳などが活発になされ、実質的な意見交換の場となりました。科学委員会は、それ自体として意思決定を行う性格の組織ではなく、委員各自がそれぞれの識見にもとづいて自由に意見を述べ、執行機関である理事会がそれを汲み上げて活動のありかたを決定するうえでの参考にするというのが基本ですが、その意味で意義のある時間となりました。

さらに、科学委員会の今後のありかたについても議論がなされました。委員会自体の規模は、当面10人程度で構成するとしても、高齢者が比較的多いことから、世代継承の意味を含め若手の研究者を、オブザーバーの形で積極的に組み込むことなどの提案がありました。

また科学委員会の委員長には安成委員、副委員長には鹿野委員が推薦され、委員会とし

て了承されました。

科学委員会は今後、原則として年2回程度定期的に開催することを確認し、閉会しました。

科学委員会は、コロナ禍のもと、オンラインでの開催も検討されたのですが、初回はなんとしても対面で行いたいとこだわってきたのは正解だった、と感じました。